

## はじめに

この一年の内外の変化は凄まじかった。

日本周辺海域の緊張はかつてないほど高まった。日本の海に中国の調査船がやってきて、日本の海上保安庁の船を追い回すという事件が初めて起きた。同事件に先立って中国海軍の大艦隊が日本周辺に堂々と姿を現わし始め、示威行動をとった揚句、この種の展開は常態化すると豪語した。北朝鮮は韓国の沿岸警備の哨戒艦「天安」を撃沈し、現在、国際社会は朝鮮半島における武力衝突勃発の危険に直面している。

国内では遂に自民党が下野し、民主党が圧倒的な議席を得て政権与党の座を手にした。政権を奪取した民主党は「真の政権交代」が実現したと胸を張り、首相に選出された鳩山由紀夫氏は「歴史を変えろという、わくわくする喜び」とともに「歴史を作らなければならないという大変重い責任の両方が交錯しています。これからがすべて勝負ですね」と語った。

そして、本稿執筆中の六月二日の今日、首相辞任のニュースが飛び込んできた。民主党の衆

参両院議員臨時総会で首相が語った内容については後述するとして、政権発足から八ヵ月、鳩山民主党は前代未聞の迷走逆走暴走を重ねた。突っ走った方向は、本来、日本が邁進すべき、あるいは日本周辺の国際情勢が指し示す日本のとるべき方向とは逆だった。

結果、本書に記した数々の問題や危機に見舞われて、わが国は断崖絶壁の淵に立っている。多くの原因が考えられる。けれど、本質的に、原因はひとつである。首相をはじめとする政治家の質の劣化である。その批判は当然、彼らを選んだ有権者たる日本人全員に撥ね返ってくる。その意味で鳩山氏の存在は、戦後日本の家庭教育及び国民教育の失敗の代表的事例として、歴史に刻まれるだろう。

たとえば普天間飛行場の移設問題に関して、首相の視野はきわめて狭い。国家の存在意義は、その国、その民族の生き残りを担保することである。生き残りを担保するには力が要る。外交力と軍事力である。このどちらが欠けても国家は十全な機能を発揮し得ない。

首相はしかし、自身の外交の基盤を「友愛」に置いた。首相の考える政治は「愛」であり「友愛」であるから、沖縄の人々が可哀相という発想しか持ち得ない。日本全体を守り、日本人の命を守るための軍事的基盤が必要で、それは中国が最大の脅威を形成する現在、沖縄、南西諸島に置かざるを得ないという大枠をとらえる見方ができないのである。

首相は軍事力自体を忌むべきものと考えているのであろう、首相の、そして民主党の理念の中には、外交を左右する軍事力の効用も、他国の侵略を思いとどまらせる抑止力としての軍事

力の効用も、存在しない。民主党の選挙公約「マニフェスト」に、「防衛」の二文字がないことが、首相及び民主党の性格をよく表わしている。鳩山首相以下、岡田克也外相、平野博文官房長官ら、民主党の中枢人物らがこそつて、普天間飛行場の移設先を「国外」あるいは「県外」にすると語ったのも、国家がどのような要素で支えられているかという認識を欠いていたからだ。

八ヵ月間の迷走を重ねた末に、鳩山首相は五月二八日、普天間飛行場の移設先を名護市の「キャンプ・シュワブ」辺野古崎地区と隣接する水域」と明記した日米共同声明を発表した。臨時閣議で決定もした。自民党案に戻ってきたのだ。御本人も民主党も、同案を自民党案と同じだとは決して認めないが、この否定自体が現実逃避である。

辺野古に戻るに際して、首相は語った。「政権を掌握する中で、野党の時代には見えなかったものが見えてきた」と。

沖縄の米海兵隊が日本に対する脅威への抑止力として機能していることに気づかなかったが、「学べば学ぶほど」「海兵隊のみならず」「米軍の存在全体の中で」「すべて連携して」「その中で抑止力が維持できる」ことがわかったと吐露したのである。

野党時代にはわからなかったというが、鳩山首相は野党になる前は与党自民党最強の派閥、政権中枢のポストを握り続けた田中派の一員だった。一九八六年の当選から今日まで二四年間、じつに四半世紀近く衆議院議員として「国民の皆様」の「いのちを守りたい」と働いてきた結

果が、抑止力について基本的な理解さえ身につけずに現在に至ったのだとすれば、失礼ながら、首相にお支払いした幾億円かの税金、議員歳費は文字どおりの無駄金だった。こういう歳出こそ、真っ先に事業仕分けしてほしい。

それにしても鳩山家は日本を代表する「名門」である。衆院議長を務めた曾祖父和夫氏、首相を務めた祖父一郎氏、外相を務めた父威一郎氏。きらびやかな肩書きが連なり、鳩山家の歴史が戦後日本の政治史とピッタリ重なることを印象づけている。私たちが問わなければならぬのは、その歴史の中で、国を代表する政治家一家で、どのような価値観が継承されてきたかである。日本のエリート、名門一家であれば、どの庶民の家庭よりも、日本という国を守り、国民を守るという責任感が伝えられてよいはずだ。

一郎氏は米占領軍による公職追放を解除され、政界に復帰したとき、政敵吉田茂氏と烈しく対立した。吉田氏の抜き打ち解散・総選挙で、吉田氏が経済復興を第一に掲げたのに対し、一郎氏が憲法改正と再軍備を主張したのは周知のとおりだ。

経済もたしかに重要ではあるが、人間も国家も経済だけで持つわけではない。日本の文化文明を反映した憲法を作り、日本国民と日本国を自力で守るための力を備えるのは当然である。一郎氏の主張は正しかったのだ。

首相の座を手に入れた一郎氏は、しかし、憲法改正にも再軍備にも関心を寄せず、日ソ国交回復に走った。国防の重要性に貢献する気迫も見せず、再軍備への貢献も一切、しなかった。

一郎氏には安全保障にも国防にも真の関心はなかったにもかかわらず、吉田氏に対抗するための単なるスローガンとして憲法改正と再軍備を旗印としたと言われても仕方がないだろう。

父の威一郎氏は一九七六年一月から七七年一月までの冷戦最中に福田赳夫内閣の外相の重責を担った。就任期間は一ヵ月、ほとんど記憶に残る事柄はないが、福田内閣の外交と重ね合わせて考えれば、自ずと外相としての功罪も明らかになる。

たとえば、一九七七年九月のダッカ・ハイジャック事件である。赤軍がJAL機をハイジャックし、乗客を人質に取った。人質解放の条件として、獄中の仲間の解放と現金六〇〇万ドルを要求した。福田首相は彼らの不埒な要求に屈して犯罪者を解放し、六〇〇万ドルを渡した。テロに屈した日本政府に国際社会は批判的だったが、福田首相は自らの決断の理由を「人命は地球より重い」との言葉で表現した。新たな仲間と六〇〇万ドルという膨大な額の活動資金を得た赤軍は、国際社会でさらなるテロ活動を続けた。彼らが奪った多くの「命」については、福田首相も日本国も責任の負いようはないのである。「命は地球より重い」という「いのち」外交は、外相としての威一郎氏の思いでもあっただろう。

もうひとつは「SS20」事件である。当時、ソ連は米中接近を警戒し、西欧を狙った中距離核ミサイルSS20を、東欧諸国に配備しつつあった。西ドイツでシュミット首相と会談した福田首相は、SS20の脅威について問われた。そのとき、福田首相がSS20についてまったく知らなかったのはあまりにも有名な逸話である。

当時の西欧と米国にとって最も深刻な脅威だったSS20に関して、その重要性和関連する軍事情報を官邸に上げ、日独首脳会談で、西側陣営の一員としてどう対処するのか、自由と民主主義にどのように貢献するのかを、常日頃から首相に具申するのが外務省及び外相の役割である。だが、首相が知らなかったということは、外相が助言していなかった、つまり、外相も知らなかったということであろう。

安全保障への無関心が祖父と父の特徴であったと断ぜざるを得ないゆえである。政治家一家鳩山家での曾祖父から祖父へ、さらに父や息子へと語り継がれてきた事柄のなかに、国家論や外交論があったのか、政治の指導者としての教訓や戒めが貴重な遺産として蓄積されてきたのかと、疑わざるを得ない。国と国民を守るために首相や外相として全責任を負って果たすべきこととは何か。身につけるべき素養、心構えは何か。そうしたものの根本をなす価値観の受け継ぎは、鳩山家にはなかったのだろうと推測する。

曾祖父から四代続く「名門」政治家一家の、なんとという空疎であろうか。だが、この精神の空疎さは、鳩山家だけのはなしなのだろうか。戦後日本の多くの家庭で、大事な価値観が語られることもなくなり、置き去りにされてきたのではないか。その精神的空洞の前では如何なる富の蓄積も無意味である。鳩山家も、日本全体も、いまここで立ち止まり、大事なことに目を向けなければならぬ。

繰り返し強調したいのは、国家の運営を担う政治家が命をかけて果たすべきことは、その国とその民族の生き残りである。そのために築き、守っていくべき国家の根本は外交と安全保障である。そうしたことについて、虚ろな目で無知の暗闇に漂う由紀夫氏の姿は、経済的豊かさに満足し、自立と名誉を忘れた鳩山家四代の、また戦後日本の、悲しく、そして限りなく口惜しい、哀れむべき姿だ。首相はじつに、戦後日本の国民教育の失敗の最も顕著な具体例なのである。

自国の安全を、斯くも長きにわたって他国に依存し続けること自体、日本はまともな国ではない。鳩山家も日本国民も、いつしか米国依存を当然と考え始めた。さらに悪いのは、米国に依存しているという意識さえ薄れさせた。米軍に基地を貸与してやっているのだから、あるいは「思いやり予算」を払ってやっているのだから、米軍が日本を守るのは当然だというような認識さえ持つに至った。首相は『新憲法試案 尊厳ある日本を創る』（PHP研究所）の中で、憲法改正の必要性を指摘し、こう書いている。

「戦後の憲法論議を迷走させてきた空想的平和主義あるいは国家主義的ノスタルジアなど、左右両翼の感情論のいずれをも排し」「新たな憲法を創りたい」

だが、首相の一連の発言と行動こそ、「空想的平和主義」の産物に他ならない。

去る三月二二日、首相は防衛大学卒業式で、命を賭して職務を遂行することになる安全保障の中核者としての若者たちにこう語った。

「諸君に私が言いたいことは、自らが活躍することになるこの世界のことを正しく知れ、とい

うことである」

その言葉を、首相自身に噛みしめてほしい。四月八日、東シナ海で中国海軍が日本の海自艦船に異常接近したことを、なぜ、一二日の日中首脳会談でまったく触れなかったのか。そのときの首相の物言わぬ姿勢が、五月三日に海上保安庁の測量船がわが国の排他的経済水域内であるにもかかわらず、中国の調査船に追尾されるという初めて起きた異常事態につながったのである。「東シナ海を友愛の海に」と首相が語っても、世界を正しく見詰めるならば現実ほど遠いことを、「正しく知れ」と言わなければならない。

中国の異常な軍拡によって、西太平洋とインド洋はまさに、二一世紀の世界の覇権争いの主舞台となる。シーレーンの安全確保が日本を含む諸国の生命線である。

世界のタンカーが運ぶ一年間の物流七〇億トンの内の一〇億トン日本が占めている。この一〇億トンゆえに国民生活が成り立っている。国民の「いのちを守りたい」と連呼した首相は、この物資がインド洋のシーレーンによって運ばれていることを「正しく知」っているのか。インド洋を開かれた安全な海として守り通すことが日本と日本国民の「いのちを守る」ことに欠かせないと「正しく知」っているのか。空想的平和主義の産物として生じた無知の海での漂流は、もうおよしになるのがよい。

そして、前述のように首相は今日、辞任を発表し、ざっと次のように述べた。

二〇〇九年夏の総選挙で民主党を選んだ国民の選択は間違っていないなかった、自分たちは「政治主導」で頑張ってきた、「子どもにやさしい」「子ども手当の実施に漕ぎつけたと、胸を張った。こうしたしつかりした仕事をしているのだが、それが国民の心に届いていないと嘆き、理由は二つだと語った。

第一に普天間問題である。沖縄への負担軽減のために必死で「国外」「県外」の道を模索したが、思いは叶わなかったと、涙ぐんだ。「日本の平和は日本人が作り上げる。米国に依存する日米安保条約を五〇年一〇〇年続けていいとは思わない」と語った。そのとおりだ。では、日本を守るに足る力を構築する努力を、鳩山氏は首相として少しでも行なったか。子ども手当のバラ撒きは赤字国債を出しても実施したが、肝心の国防については、ただでさえ足りない予算をさらに削り、人員不足で満足なオペレーションのできにくくなっている自衛隊員の数をさらに削った。それをテレビカメラの前の事業仕分けで行い、支持率の上昇を期待した。こうしてみると、言葉が先行し、その言葉の裏付けを置き去りにする首相の病癖は最後まで変わらなかつたといえる。

国民の支持を失ったもう一つの理由を、おカネにクリーンな政党だったはずが、そうではなかったことが明らかになったことだと、首相は率直に認めた。自身の秘書が政治資金規正法に違反していたが自分は知らなかったと詫び、同じ問題を抱える小沢一郎幹事長にも辞任を促した。民主党代表になれたのは小沢氏の支援があつて初めて可能だったが、その小沢氏の金権体質を切つて捨て、民主党の再生につなげるべく、最後の場面で見せた気迫は、私も評価したい。

本書の出版は新首相が選ばれたあとのことになる。誰が次期首相となっても、本書でも触れた民主党の種々の政策、とりわけ「政策集INDEX2009」を根本から書き替えることなしには、民主党は国政を担う責任を果たせないだろう。鳩山首相及び小沢幹事長辞任で問題が片付くほど、事は容易ではない。待たれるのは、真つ当な大人の政治家である。日本人としての誇りと志を有し、日本を守る国防力と外交力の立て直しに政治生命を懸けて取り組む気概と気力を備えた政治家、政党である。

少数かもしれないが、日本にはそのような政治家がたしかに存在することを、私は実感している。だからこそ、私は日本の未来に希望を持ち続けるのである。

二〇一〇年六月二日

櫻井よしこ

日本を愛すればこそ、警鐘を鳴らす

目次

第一章❖忍び寄る周辺諸国の脅威 17

- 力で攻める中国に心で戦うチベット 18
- 北朝鮮関連船舶の臨検もできない自衛隊 27
- 日本で暗躍するロシア人スパイとの闘い 31
- 米国の核削減で深まる中国の脅威 35
- 先達の志が築いた日本初の公立小学校 40
- 自民党よ、負けるなら潔く負けよ 43
- 集団自決命令、異論を封ずる沖縄メディアの異常 46
- 地球温暖化対策で日本に欠けている視点 57
- ウイグル弾圧、国連で公平な調査を 60
- 民主党はミラエストを早期に公表せよ 63
- 小沢一郎氏問題、政治資金の闇を追及する 67
- 米中戦略がもたらす日本の危機 71

- ウイグルの母が告発する「中国の嘘と弾圧」 74
- 子どもが親を変える「親守詩」を広めた松山市 84

第二章❖民主党政権に国政が担えるのか 89

- 靖国参拝を蔑ろにする両党首の浅はかさ 90
- 民主党の霞が関改革に早くも赤信号 95
- 『国破れて霞が関あり』が明かす卑劣な体質 102
- 民主党「日の丸事件」が映す国家観の欠如 105
- 現実視点なき民主党に国政が担えるのか 108
- 中国に手練り寄せられる台湾の正念場 111
- 自民党は今こそ保守の価値観を貫け 117
- 北朝鮮有事に備えて日米韓は連携せよ 121
- 温室効果ガス25%削減で国民はいくら負担するのか 125
- 緊迫する台湾情勢に差した二条の希望 128
- 祖父から学んだ鳩山首相「友愛外交」への不安 134

いま本当に危うい日本の金型産業	137
民主党らしさを奪う小沢一郎氏の「言論封鎖」	140

### 第三章 ◆ 米中の狭間に沈む日本外交

国際情勢を無視した鳩山政権の平和論	148
鳩山首相は日米関係の危機を直視せよ	152
東アジア共同体は誰も振り向かない古証文	155
日米首脳は中国の脅威を過小評価するな	162
外国人参政権法案にみる鳩山政権のご都合主義	166
拉致を放置する中国政府の呆れた姿勢	169
日教組に蝕まれた義務教育を立て直せ	172
「中国の頭脳」を国費で育む大学教育の惨状	184
CO <sub>2</sub> 削減を唱えるIPCCと鳩山政権への疑問	194
政治資金をめぐる鳩山首相の「言行不一致」	198
拉致問題で痛感する日本政府の脆弱さ	202

147

皇室を政治利用する鳩山政権の大いなる過ち	205
火星には生物がいる!? 科学の発展に夢を託したい	210
北朝鮮有事、そのとき日本は何をすべきか	214
小沢一郎氏の矛盾に満ちた変節を疑う	217
日本を脅かす外国人参政権法案に断固反対	220
米国から「しつぺ返し」を受けた鳩山外交のお粗末	223
普天間問題と密接につながる中国の脅威	227
日本の家族をもつとバラバラにする夫婦・親子別姓法案	230
日本の危機を真摯に訴える『日本核武装入門』	233

### 第四章 ◆ 矜持なき国は滅びる

CO <sub>2</sub> 温暖化説、日本はなぜ検証しないのか	238
米国の介入を阻む中国の軍事戦略	242
デノミに失敗した金正日体制を支える中国	245
夫婦別姓法案にみる民主党の官僚依存体質	249

237

- 日米同盟の脆弱さを鳩山首相は理解しているか 255
- 外国にも円が乱舞、鳩山子ども手当 258
- 竹島の「韓国領土化」がいま加速している 264
- それでも普天飛行場を現行案で移設せよ 268
- 米国の医療保険改革が日本に及ぼす影響 276
- 改名申請者が増え続ける韓国の危うさ 279
- 朝鮮高校の授業料無償化は不当だ 282
- ダミー取引で外資に奪われる日本の森林資源 288
- 哨戒艦沈没、北朝鮮関与を否定したい李大統領 291
- 海軍力を誇示する中国、日本は国防の見直しを急げ 296
- 普天問題は沖繩の真の発言に向き合え 300
- いまこそ出でよ！ 勇気ある保守政治家 303
- 中国軍の脅威、問題外の日本の対応 306
- 戦略力なき鳩山首相では日本が持たない 312
- 日米独の三カ国が再び世界経済を牽引する 315